

ウィリアム・ワーズワスの「不滅 のオード」について

布施 伸之

序にかえて

古代ギリシャの詩人ヘシオドスは『仕事と日々』の中で「五時代の説話」という章を設けて人間を歴史的に「黄金の種族」、「銀の種族」、「青銅の種族」、「英雄の種族」そして「鉄の種族」の五種族に区分けている。それによると、オリュンポスの神々が最初作った黄金の種族は「心に悩みもなく苦労も悲歎も知らず、神々と異なることなく暮し」、「あらゆる災厄を免れて宴楽に耽っていた。」従って老いを知らず、死に際しても苦痛を感じず「さながら眠るがごとく」であった。さて、ゼウスがオリュンポスを支配するとともにこの時代は終わり、銀の時代を迎える。この種族は瀆神ゆえにゼウスによって滅ぼされ、次に現われた青銅の種族は互いに血で血を洗う殺し合いの末滅ぶ。次いでトロイア戦争の英雄時代を経て、ヘシオドス自身が苦しんでいる最悪の鉄の時代を迎える。この時代の人間は「昼も夜も労役と苦悩に苛まれ」、「神々は苛酷な心労の種を与え」る。とはいえゼウスの娘「正義」を信じ疑わなければ「さまざまな禍いに混じってなにがしかの善きこともある」が、この種族は「神々を恐れることを知らぬ、けしからぬ振舞い」ゆえに、「悲惨な苦悩のみ残り、災難を防ぐ術もな」いのだとい⁽¹⁾う。

さて M. Arnold は、“Memorial Verses” と題する作品の中で He too upon a wintry clime / Had fallen—On this iron time / Of doubts, disputes, distractions, fears. (彼もまた冬の季節に一懷疑と論争と狂気と不安とのこの鉄の時代に難儀していた。) と述べているが、この「彼」こそは、われわれがこ

の拙論で取りあげる詩人William Wordsworth その人である。われわれは彼の思想の頂点を飾る“Ode, Intimations of Immortality from Recollections of Early Childhood”を味読し、鉄の時代に苦しんだワーズワスがいかに再び黄金の時代を自身にもたらしえたか探してみたい。

I

アイアンビック・ペンタミターのこのオードは詩人の楽しかりし昔日の回想とともに始まっている。第一連に流れる悲哀の調べが、現在の詩人のおかれた状況を暗にわれわれに伝えている。この哀調の中で celestial light, glory, freshness という語句がひとときわ輝いているが、この輝きもかえって詩人の心の痛ましさを強めるばかりである。

相変わらず虹は雨上がりの空に大きくかかり、バラは愛らしく咲き、小鳥は梢でさえずり交わし、子羊は小太鼓に合わせて跳び回りはすれど、詩人ひとりには思いに沈んでしまう。それでも、昔のように昂揚した気持ちが戻ることもあるが、それも一時しのぎでしかない。それ故に、徒に幸福な牧童の叫び声を聞き彼らの喜びのご相伴に与るだけである。

Whither is fled the visionary gleam?

Where is it now, the glory and the dream?

(11. 57—58)

(大意：あの神々しいきらめきはどこへ飛び去ったのか？／あの栄光と夢とは今どこにあるのか？)

全体を大きく三部に分かつなら、その第一部の終わりに相当するこの二行において、かつての幸福を惜しみ、悲嘆に暮れた詩人の暗い気分はその最高潮に達している。詩人は不幸なのである。人は誰でも幸福になる権利がある。自分は最早幸福にはなれないのだろうか。絶望の淵を彷徨う詩人はこの疑問の答え

を模索する。それが *Our birth is but a sleep and a forgetting: (1.59)* (われらの誕生は眠りと忘却にすぎぬ) で始まる連を含めた四つの連から構成される第二部である。これらの連には、周知のごとく、プラトンのイデア思想からの援用がみられるところだが、これについては後述することにして、今はワーズワスのコンテクストに従って行くことにする。

Heaven lies about us in our infancy!

(1.67)

(大意：天国はわれらの幼年時代には、われらのまわりにあった！)

これまで幾度かわれわれに提示されてきた *celestial light, the glory, the visionary gleam, the dream* 等の語句の意味がもう一つ判然としなかったのだが、ここにきてようやくわれわれはその意味の何たるかを握むことが出来るのである。すなわち子供時代とは天上の生活を享受出来た時代であること、つまり「天の光明」、「あの栄光」、「あの神々しいきらめき」そして、「かの地での夢のような日々」に満ちていた時期であったのだ。以上のような彼の考え方を示唆してくれる語は、この作品以外にも見られ、例えば、彼が渡仏中に *Annette Vallon* との間に生まれ、その顔を一目も見ずに十年間の歳月を経た後、初めて対面した娘 *Caroline* に語っている、幾分言い訳がましく聞こえなくもない *Thou liest in Abraham's bosom all the year*, (お前は常にアブラハムのうち懐にいるのだよ) における *Abraham's bosom* をはじめ、“*To the Cuckoo*” 中の *visionary hours* 及び *that golden time* 等があるが、いずれもその源を同じうしていることが理解出来よう。

子供の頃は、神のうち懐の自然の中で、天の光明を一身に浴びて、自然と一体になって過ごしていられた。このように子供は、自然、天上、神と無距離の所にいる。これと対照的なのが大人である。ワーズワスのこの考え方には注目しなければならない。印欧世界には、歴史をさかのぼって遠くはインドやゾロアスター教の古代ペルシアに、下ってはキリスト教世界に、二元論的思考の伝

統があって、神対人間、自然対人間、善対悪、正統対異端、古典主義対ロマン主義、素朴文学対感傷文学等の二分法が思惟の基本として連綿と続いてきたが、ここでも子供は神とともにいる祝福された者、対する大人は神を忘れ汚れた者というその基本構造が認められる。

人はこの世に生まれ落ちてより様々な体験をする。両親のあふれんばかりの愛情を一人占めしていた幼な子、屈託なく終日遊び戯れていた子供も、やがては学校へ通い、社会へ出て独り立ちをする準備を始める。それについて玩具から学業、仕事、恋愛、婚礼、葬儀等が彼もしくは彼女の心を捕らえるようになり、歳月は、この世の避けられぬくびきを人にもたらし (cf. *The years to bring the inevitable yoke*, 1.125),

Full soon thy Soul shall have her earthly freight,
And custom lie upon thee with a weight,
Heavy as frost, and deep almost as life!

(11. 127–129)

(大意：たちどころに汝の魂はこの世の重荷を背負い、／そして習慣は重石となって汝の上におおい、霜のごとく重く、／ほとんど生き物のように内深く入り込む!)

のである。それ故に「あの輝きに満ちた神々しさ」 (*the vision splendid*, 1.74)は次第に弱々しくなり、日常性の中に薄れてしまうのである。(cf. *At length the Man perceives it die away, / And fade into the light of common day*. 11.76–77)

第二部に続く連、すなわち第九連以下全てが第三部を構成しているが、われわれはこれまでの沈痛な響きとは一変した、詩人の昂揚した気分へと導かれる。

O joy! that in our embers

Is something that doth live,
That nature yet remembers
What was so fugitive!

(11. 130-133)

(大意：おおなんという喜びか！我らの生の燃えさしの中に、／未だ命あるものが存在しているとは。／かくもはかなく過ぎ去ったものを／自然が未だ忘れずにいるとは。)

この唐突な気分の転調には驚かざるを得ない。とはいえ先述のように、この世での歳月は避け難いくびきを人に課し、人はこの世の重石を背負って生の苦しみに耐えねばならぬのだが、されどこの一方で、この同じ歳月を振り返ってみると、詩人の心には感謝の気持ちが絶えることなく沸々と湧き上がってくる、というのである。このきっかけを作ってくれたのが自然なのである。

詩人は自然との交渉を回想して、感謝と称賛とを捧げる対象について言及している。それは最も祝福に値するもの、つまり喜びや自由、あるいは幼年時代の素朴な信条に対してではない。そうではなくて、時折ふと心に浮かんで来て、それがどういう意味を持っているのか解からぬうちに消滅してしまい、名状し難いその訪問者がその後も再三に渡って自分を捕え、いつまでも心の中に残り、感覚と外界の事物とに対し執拗な疑念を抱く人、あるいは、人智では計り難い崇高なものに接し、体中の血が瞬時にして引いてしまい、その存在に生命を奪われてしまう程の畏敬の念に打たれたことのある人、かかる人に対して詩人は感謝と称賛の歌を送ろうというのである。そしてさらにこれに加えて、幼年時代に目にした事物に寄せた愛情に対して、そしてその頃のおぼろな回想に対してもそうであるという。何故ならばこれらの愛情と回想とは、われわれの日々を潤す光であり、われわれが物を見る時の観点となる光でもあるからであり、かつそれらはわれわれを支え、慈しみ、そしてこの世における我々の喧騒の歳月が久遠の沈黙の中では光芒に舞う塵のごとく刹那に過ぎないと

思わせる力を持っているからである。このように幼年期の回想と愛情とは、詩人にとっては常に目覚めている、決して亡びることのない真理と自覚されて行く。

さて、人智では計り難い崇高な存在に怯えるのは子供ではない。大人である。この付近を注意して読んでいくと詩人のある意図が推測出来るようだ。それは子供と大人、すなわち最も祝福に値する者とそうでない者との共通項が挙げられている点である。つまり大人も子供同様神との一体化という至福に与かれる、と仄めかしているのである。次いで、神との合一をどちらかと言えばかなり抑制された冷静な気持ちで歌いあげているのが、第162行から始まる七行である。ここはワーズワスならではの創造力が産み出した傑作であるばかりでなく、この作品全体を通して彼が言わんとした観念が一つに総合されていて、これ故に彼の全思想が精華となってここに開花していると述べても過言ではあるまい。

Hence in a season of calm weather
Though inland far we be,
Our Souls have sight of that immortal sea
Which brought us hither,
Can in a moment travel thither,
And see the Children sport upon the shore,
And hear the mighty waters rolling evermore.

(11. 162-168)

(大意：されば穏やかな日和の季節に、／遙か内陸にあるとも、／われらの魂はわれらをこの世にもたらせし／あの不滅の海を目にし、／瞬時にそこへ進み行く。／そして子供らが磯辺にて戯れるのが目に見え、／力強き波が永遠に寄せ返しているのが聞こえてくる。)

一見何でもない情景描写のように思えるのだが、そう単純ではない。詩人は田園の見晴らしのきく場所に腰掛けていたのであろうか。穏やかな天気のために詩人は思索に誘われていく。Hence in a season of calm weather / Though inland far we be, この二行がそれ以下の解釈を困難にさせているようだ。すなわち、a season of calm weather と inland とが、目の前の現実の光景であるのと同様に、that immortal sea に関しても、遠く離れているとはいえ、詩人が想い浮かべているのは実在の海だとわれわれは解してしまうのだ。従ってこう考えると、その次の hither とさらにその下の thither も何ら迷うことなく、「ここ」すなわち inland, 「あそこ」すなわち that immortal sea と早飲込みしてしまうのである。すると that immortal sea の意味は地球誕生以来休むことなく波打つ「不滅の海」となり、最後の二行では、海岸で戯れる子供たちのどこにでも見られる场景と、怒濤逆巻く様とを歌っているということになる。

しかしこれでは全くこれまでのコンテキストと辻褃が合わない。問題は第162行と第163行との処理の仕方に係っている。これらがあるためにそれ以下の解釈がうまくいかないのである。ではこの二行を取敢えず無いものとして考えてみよう。幾何学の問題を解くときの要領で、第163行と第164行との間に補助線を引いてここで前後を二つに分割してしまう。すると残りの五行だけがわれわれの目前に提示された恰好となる。that immortal sea は具体的な海の姿が前ほど表に現れず、Which brought us hither と一層緊密な連関を帯びた象徴的な意味を持つようになる。すると hither も先程の inland の意味から別のもっと深い意味が見えてくる。すなわち、hither は「海岸から遠く隔たったここ」では不十分で、「この世」、思うにまかせぬ如何ともし難い「人の世」である。こうなると thither はおのずと「この世とは相反する所」、「彼岸」、あるいは逆に、「人が生まれる前に存在していた魂の安息所」、「神の御座所」ということになる。これすなわち that immortal sea に他ならない。sea が用いられているのは、心理的、生理学的見地や、あるいは生物発生の起源を辿れば

推察するに難くはないであろう。sea は母なる海である。ここまで来れば残りの二行, And see the Children sport upon shore, / And hear mighty waters rolling evermore. もこれまでより深い解釈が可能であろう。子供は目に見える「海岸で遊ぶ子供」ではない。「母なる海の岸辺で、つまり神の光明のもとで安らう子供」, 「神と一体となっている子供」である。しかも大文字で綴られているこの the Children とは神の一被造物たる人類の意味であることが明言されており、従ってこの中には子供は言うに及ばず大人も含まれる訳で、これら神の子らが神に見守られて安らうているのである。この確信は揺ぎなく、壮大な宇宙を統治する偉いなる神の力を、無窮に絶えることなく続く海の力強い波の姿に喩えて象徴的に語ることによって、その確信の不動性を巧みに表現しえている。

では次に例の補足線を取り去り、この七行を全体的に眺めてみよう。前述したように、詩人はある穏やかな日和のために物思いに耽っているのである。「われら遙か内陸にいるとも」は、彼方の海に思いを馳せるための導入部の働きをしているのである。従ってこの海は詩人の脳裏に浮かんだ海であり、しかもすでに具象を昇華してしまって、いわば天上の海に変じているのである。ワーズワスはわれわれを想像の世界へ誘うために第162行と第163行を巧みに用意しているであろう。

ところで、今 inland は目に見えない sea を導く観念連合の一手段であると述べたが、単にそれだけにとどまらないようだ。a season of calm weather, inland, sea, the Children sport upon the shore, the mighty waters rolling evermore, これらは一様に経験として見たことのある具体的な事象である。しかしこれらのうち a season of calm weather と inland を除いたものは、たとえば、sea は海そのものではないし、又 the Children sport upon the shore も現実に今日の前にあるそのものではないのである。これらはいずれも詩人によって想起されたものなのである。そこでわれわれは次のように推測出来る。ワーズワスは目に見えるままの自然の姿を描写（実写）することを彼の

創作目的としているのではなく、それらの目に映ずるものの背後に、内的なものが現われている印を示さんがために目に見えるものを取扱っていると思われる。彼の思想の一つは、自然の事物の背後に、ある照応関係を司どる存在、言い換えれば汎神論的な神の存在を認めようとするものであり、その限りにおいて彼の描写するものはしっかりとした写実に支えられていなければならなかったのである。ワーズワスが写実主義者、自然主義者といわれうるのは、彼が写実そのものに終始しているとか、透明なガラスのような魂を通してものを客観的に描写しているとかいう意味ではさらさらしない。そうではなくて、あくまで諸々の自然の事物の奥に存在する非物質的で霊的なものを認識するための手段としての限りにおいて、ただこの限りにおいてのみ、彼は写実主義者と呼ばれうるのである。

ワーズワスは、自然を描きながら、同時にその内奥の意味をも表現していることをわれわれ読者に知ってほしかったのである。この二点を満足させる形式は、Hence in a season of calm weather / Though inland far we be,の二行でまず開始しなければならなかったのである。観念詩がとかく観念そのものを表出してしまいかねないのだが、ワーズワスはそのような陥井に落ち込まないために、出来るだけ易しい言葉を選び、しかも一見なんでもないとと思われるような自然描写に見せかけて彼の思想を作品の中に盛り込むことに成功しているのである。この七行にはこれまでわれわれが見て来た限り、彼の自然に対する思想があり、人生哲学があり、芸術理念がある。英詩には人生観や世界観をその中で十分に表現しうる力がある。英詩の魅力がここにある。

文学作品の中から観念や思想だけを読み取り、それらの流れをもとに思想の歴史を作ろうとしている一派は、ワーズワスのこの七行の驚嘆すべき歌われ方をどう評価するのであろうか。作品の中の観念や思想はその作品の一つの特色にすぎない。詩人が希望していることは、彼の思想そのものを読者が把握してくれさえすればそれで十分というのではないはずだ。自分の思想をいかに歌うべきかに絶えず腐心するのが詩人である。これを味読してこそ詩の鑑賞の醍醐味

と言えよう。

さてワーズワスは the Children の中でも神から遠ざかった大人を救済しようとしている。子供、無論救われているさ。大人だって子供の頃があったはず。それが現世的な事柄に追われていくうちに、神から離れてしまったように見えるが、実はそうではないのだ。大人は子供とは違った仕方で、子供の時よりももっと深く、しみじみとした実感をともなって神の存在に気付き、神の偉大さを知ることが出来るのである。つまり、子供には与えられていない the philosophic mind (思索する心) を大人が次第に身に付けていくからである。この心を養うことによって大人は自然の中に隠れた神的存在に気付くようになり、その結果この作品のエピグラフとして用いられることもある “My heart leaps up when I behold” の中の natural piety (自然に対する敬愛) に目覚めるのである。そしてかかる過程によって大人は神との一体化へ導かれていくことになるのだ。さらにここで、先にわれわれが保留しておいた O joy! that in our embers/Is something that doth live,/That nature yet remembers/What was so fugitive! におけるワーズワスの伏線も明確になってくるようだ。つまり、大人の魂が神と合体出来る条件がここに暗示されているからなのだ。大人は救われよう、ただし幼い頃小川や森で遊び戯れた日々を過ごした経験があり、ちょうど燃えさしに火が再びつくように、幼年時代を回想し心を熱くすることが出来る大人ならば。なぜならば、幼い頃に自然の事物に寄せた愛情やその頃の回想は、神に愛されていた時代の、同時に神の御座所にての、体験であるが故に、真理に他ならないからだ。

では厳かに歓喜の歌を歌おう！子供の時のように小川の中で飛び跳ねることは出来ないが、また小太鼓に合わせて子羊と踊ることは出来ないが、あるいは5月の何か予感を孕んでいるような薫風を切って遊び回ることは出来ないが、それでもいいではないか。代わりに、われわれ大人は、薫風の中に神の優しさを感じ、自然の中に幼年時代のよすがを発見し、しばしその頃を回想し心楽しくなれ、無常なるこの人の世にあっても不易なるものの存在に気付き、人生の

苦悩の中にあっても絶えずわれわれを見守ってくれている神に気付き安心立命の境地に達することが出来るようになったのではないか。われわれはけっして泉、小川、丘そして森を愛せなくなったのではなかった。ただそれらの中に混然一体となって溶け込み、共に戯れることをしなくなっただけなのだ。今はもっと深い敬愛の念をもって幾分距離をおいて暖かい眼差しをそれらに注げるようになったのである。この世の無常さ、はかなさ、おぼつかなさを限り無く見てきたわれわれ大人には、幼年期に見たのと同じ沈みゆく夕日の周りに群がるあかね色の雲にも深い意味のあることがしみじみと実感出来るのである。われわれ大人に以上のような「思索する心」を授けてくれた歳月の作用に感謝しようではないか。今や詩人は、野に咲く名も知れぬ花を見ても、その内に秘められた意味があまりにも深く涙さえ出なくなっているのである。

II

1791年11月ワーズワスは再びフランスへ渡る。渡仏の目的はフランス語を学ぶためというのが表向きなのだが、どうもそればかりではないようだ。前回、ケンブリッジの最終学年に在学中、卒業試験でやっきとなっている他の学生達を尻目に、友人 Robert Jones と二人でフランス、スイスさらにドイツに至る徒歩による大旅行を敢行したのは、1790年7月から10月にかけてであった。フランスのカレーの港に二人が到着したのは7月14日の革命記念日の前日であった。一年前の革命勃発の日を目の前にし、彼らの行く先々で出合ったフランス人たちは、老若男女を問わず「国を挙げて歎喜と希望とに酔痴れ⁽²⁾」、「ぴかぴか光ったほやほやの自由⁽³⁾」を手にし、降って湧いたその自由を共に分たんとばかりに、この異邦の二人の青年をお祭り騒ぎの輪の中に招き入れてくれた。これぞ人類愛、同胞愛なり！と青年ワーズワスの胸は沸き立ったのである……。あの時の忘れえぬフランスとそこの人々にもう一度合いたいというのが偽ざる彼の本音であったようだ。

彼はオルレアンで見つけた落ち着き先の安い下宿屋で、同じくそこに逗留していた Michel Beaupuy というフランス軍の大尉と知り合いになった。ポーピュイ大尉は貴族階級の出身ではあったが「その社会的地位を捨て、革命に奉じて、⁽⁴⁾同階級の者たちの彼に寄す尊敬をも捨てていた。」彼らはオルレリアンの近郊のブローアにあった愛国者クラブで一緒のところをよく見かけられた。街の中を、その周辺の森を散策しながら、ポーピュイはワーズワスに彼の福音—理想的政治形態としての共和政体—を盛に説くのであった。グルイによれば、ワーズワスはそれ以前には明確な政治的信条を持ち合わせてはいなく、又、共和政体そのもの⁽⁵⁾に関して実態が把握出来ていなかったという。こうした政治的無関心は彼がその方面においていうなれば Tabula rasa (白紙) であったことを証し、それだけにかえてポーピュイの説く共和政体の色に、激し易い彼の気質も手伝って一瞬にして染まったといえるようだ。又、前回の渡仏の際同胞愛のお祭り騒ぎに決定的に魅せられていた彼としては、すでに受け皿が出来ていたとも推測出来、この限りで染まるべくして染まったとも言えるのではなからうか。

以上のようなポーピュイとの交渉と平行して、一説によれば、下宿探しをして部屋を見に行った折、部屋代があまりにも高過ぎて手が出なかったので間借りは出来なかった家があったが、その家の娘だといわれてもいる4才年上のフランス女性 Annette Vallon との親しい交際もあった。これも激しい恋愛感情にまで発展し、アネットは彼の子供を宿すまでになる。

とはいえ、もともと二度目の渡仏に際して叔父に工面してもらった旅費は数ヶ月滞在出来る程度の額であったという⁽⁶⁾。アネットとの間の子 Calorine が生まれる数ヶ月前の9月初旬、ワーズワスは兄宛にお金の無心の手紙を出している。兄から送金があったか否かは明らかではないが、その後ついに旅費は底をつき帰英やむなきに至る。彼は生まれた愛娘カロリーヌの顔さえ見ずに1792年12月末あるいは一説には年明け早々ロンドンに戻っている。

フランスに残してきた愛する者達と共に暮らすために、あるいは彼女らをイギリスに連れ帰るために、ワーズワスはすぐにもフランスへ戻るつもであった

という。しかしそうこうしているうちに、1月にはフランス王ルイ16世がギロチンにかけられ—この時にはワーズワスはむしろ喝采さえあげたというが—翌2月にはイギリスがフランスに宣戦を布告—彼は祖国の暴挙にひどく立腹したという—両国は国交を断絶してしまい、彼は渡仏の機会を失ってしまうのである。そして3月からはフランス全土を震撼させたあまりにも有名な恐怖政治が開始されるのである。フランスは血で血を洗う凄惨をきわめた内部闘争の場と化し、又対外的にも戦わねばならぬという革命の泥沼と化していく。これは、純朴な同胞愛に燃え、共和政体が明日にでも出来ると信じていたワーズワスにとって予想外の進展であった。彼は惨状を耳にするにつれ、人間に対する不信感をつのらせると同時に、そういう状況下に最愛の者を置き去りにしてきたことに対し強い良心の苛責を覚えたのであった。なぜなら8才で母を亡くし、14才で父と死別し、兄弟妹がばらばらにされ、近親者や他人に預けられてしまい、両親のいない寂しさ、みじめさ、心もとなさを痛いほど知っているこの自分が、間違えてもけっしてしないと信じていたことを、他人ならぬ自分の娘や妻に対してしてしまうなんて、正気の沙汰ではないと考えたと推測できるからである。この結果自分自身に対する不誠実感、不信感をも強めて行き、ついには、彼の精神に長期にわたり深々と傷をつけ、周知のように、その後数年間妹ドロシーの看護が必要なほど彼の精神は病んでしまうのである。

こうしてワーズワスは、自分をも含めた人間に対する深い絶望感を発端として、現実世界に背を向けて社会との交渉を断ち、⁽⁷⁾ いうなれば隠遁者として人間から逃れるように田園に引き籠ったのである。

かかる人間に文学をやらねばならぬという使命感がそれでも尚かつどうにも捨て難く離れぬなら、彼の文学は、現実世界と面と向き合ったものとはおよそ無縁な形をとるのではなかろうか。しかし文学が文学として成立する条件、これは文学者の数があるだけ、否、この世に現に存在し、かつ存在していた人の総数だけ数えられ、それほど千差万別ではあろうが、しかしいずれの条件にも当てはまることは、文学とは他ならぬ人間及び人生を取扱っている点であろう。

これ故に隠者ワーズワスは自ら自己自身へ立ち帰らねばならなかったのである。己が自身のこれまでの人生を改めて見つめ直すこと、ことに自分がどちらかと言えば疎かった現実世界や政治と自分との交渉を振り返るというのではなくて、自分が誰よりも一番親密に交わり自分の人生経験の大部分を占めている自然—しかもこの自然は、フランス革命と係った一連の体験が彼に苦い教訓として残った人間不信とは異なり、自分を「けっして裏切らない」と断言出来る程であった—との交渉を再びじっくりと眺めてみることに、これは至極当然の成行きではなかろうか。従ってワーズワスの文学は回想文学とならざるをえない。しかも極めて個人的色彩の濃い回想文学になると誰しも思うところではあるが、その予想に反して彼の回想文学の根底には常に自己を超脱した人間性一般に対する深い明察と憐憫の情とが流れている。この故は、一見逆説的に聞こえるかもしれないが、彼の個人的体験から求められよう。すでに再三述べているように、人間性に対する絶望から彼は隠者の境遇を強いられはしたが、幸か不幸か彼にとっては己が一人の詩人として拠って立つところのものは、まさにこの絶望を出発点としていたと言えるからである。すなわち、最も良く知り抜いた自然との交渉を振り返ることによって悲惨な状態にある人類を再び救う手がかりを求められはすまいか？これこそ詩人として自分に課せられた使命ではないかと。

III

さて、ワーズワスといえは *Imagination* を思い浮かべる程このことばは良く知られている。そしてこれと回想文学という彼の作品の特性とは比較的容易に結びつくであろう。しかし彼の回想文学がプラトンの想起説（靈魂不滅の説）と結びつくまでにはかなりの時間が必要だった。彼がプラトンを知ったのは他ならぬコールリッジを通してであるという。その模様をルグイは次のように語っている。

「愛は世界の法則であり、神は宇宙の魂で、真理発見のためには分析や論証より直観の方が優るとすること、また目に見える事物は実在の象徴と考え、万物は動物も花も「無限の精神の单子」とみなすこと、これらの考えはワーズワスにとって何もかも目新しく驚くべき考えであった。クライスト・ホスピタルの陰気な生徒は、ホークスヘッドの喜々とした生徒に彼が後にその楽天観と自然宗教を打ち建てることになった土台を授けたのである。あるいは、こう言ってよければ、コールリッジはワーズワスの頭に偉大なる総合という観念を吹き込んだのであった。コールリッジのイメージは嵐のようにすさまじかったけれども、その斬新さと幅の広さのために、この時点では「少なくとも半無神論者」で、それ程偉大な探求を試したこと(9)もなかった者に深い印象を与えたのであった。」

この時二人はまだ知り合っていない頃であった。「偉大なる総合という観念」が形象化するまでにはおよそ10年の歳月が流れる。ドロシーの日記によれば、ワーズワスがこの「不滅のオード」を書き始めたのは、1802年3月27日であるという。(10)そしてこの夏には最初の四連が出来上がったという。(11)しかしその後は一向に進捗せず、再開までには数年の時の推移を要した。すでにみてきたようにその四連は一貫して、自然に接して以前は感じた感動が今や感じられなくなったという嘆きで終始している。ところで、この同じ1802年の3月には、有名な“To the Cuckoo”（3月23日及び26日）と、(12)“My Heart Leaps up When I Behold”(13)いわゆる「虹」（3月26日）が書かれているのは周知の通りで、かっこうは詩人をおかつての子供時代という「黄金の時代」へ再び誘ってくれる使者として描かれ、「虹」はあたかも「かっこう」で体現されている自然に対する鋭敏な感受性を老境にあっても消えることなく持続させたいものだという詩人の願望がテーマとなっている。ところがこのまさに翌日この「不滅のオード」は開始され、しかも沈痛な響きの四連が書かれた後ぶつりと数年間中断された点を思うと、「虹」のあの願望は恐らくかなえられそうにない悲願

ないしは絶望とも受け取られるのである。すると「虹」の一節 Or let me die! は単なる字づらごとではなく、感受性の衰退は実は詩人としての生死にかかわる大問題を孕んでいると想像出来る次第である。

ところでこの「不滅のオード」とコールリッジの“Dejection”との密接な結びつきはパウラが詳密に解説してくれているのでよく知られている。⁽¹⁴⁾ 一体にワーズワスの作品は、“It is a Beauteous Evening, Calm and Free”に典型的に見られるごとく、一見どちらかと言えば高尚な思想とは無縁と思われる彼の実人生における一駒と結びついていることが多い。又、彼の作品にはある情景に直接自ら関与した人でなくてはとうてい表現出来ないような細部が随所に見られる。こうしたことからパウラの指摘する一連のワーズワスとコールリッジの実生活に関するどちらかと言えば卑近な要素の混ったやりとりに、われわれは大変興味を覚える訳である。特にこの作品の第七連で描写されている6才の子供とは、コールリッジの1796年生まれの長男ハートレーの遊ぶ姿であるというパウラの指摘、それと、かつては「その姿は、神々しいものを見た時のように父親の目を輝きで満た⁽¹⁵⁾」した子供が、今ではその同じ子供の父親であるコールリッジにとっては後悔と不安の原因となり、彼の境遇はますます辛いものになったと嘆く相手に応える形で、ワーズワスは「不滅のオード」の後半すなわち第五連以後を書き進めたのだとパウラが述べている時、われわれはさもありなんと思わずにはいられないのである。

ところで、これらの出来事が起きたのは1802年から1803年の秋にかけてであるようだ。この時期は、先述したごとく6月に第四連まで書いた後は、いわゆるこのオード執筆の中断期に相当しているのだが、にもかかわらずワーズワスの創作活動は一向に衰えを見せてはおらず、*The Excursion* の第一巻と第二巻の大部分を1802年に書き上げたのをはじめ、1802年から1803年の二年間に約40篇もの詩を書いている。又その頃の大きな出来事としては、1802年の夏フランスを十年ぶりに訪れ、アネット・ヴァロンと再開し、娘カロリーヌとは初めて会い—この折“Composed upon Westminster Bridge”や“*It is a Beaute-*

ous Evening, Calm and Free”等のソネットが書かれた一長年の懸案事項に終止符を打ち、帰国して一ヶ月後の10月4日にはドロシーの幼なじみの Mary Hutchinson と結婚、明けて1803年の夏にはコールリッジとドロシーを伴い一ヶ月半にも及ぶスコットランド旅行—この時には“To a Highland Girl”が生まれ、また“The Solitary Reaper”の一部分などの佳作が生まれた—を楽しむといった具合である。これからすると非常に多忙を極めた中で約40篇もの作品を書き上げたことになり、創作活動の衰退期どころかまさに油ののりきった絶頂期と言えるめざましい活躍ぶりなのである。こうしたことから「不滅のオード」の中断には、この作品固有の要因があるのではなかろうかと考えたとして不思議はないのだ。

さて、この作品に扱われていて他の作品にはないもの、それが他ならぬプラトンの想起説の思想なのである。すでに触れたごとくワーズワスの詩人としての使命は、彼が知悉している自然との体験を通して、神から遠ざかって悲惨な状態にある人間—特に大人—を再び神に近づけることであった。われわれは、自然の幸福な営みと比して人間がいかに惨めな生を送っているかを嘆いているワーズワスを“Lines Written in Early Spring”中でよく知っている。又、自然の事物が成人となった詩人を幼年の「黄金時代」に誘ってくれる典型を“To the Cuckoo”で知っている。あるいは、“The Tables Turned”中で、人間を知的にも感性的にもあるいは倫理的にも高めてくれる師としての自然を知っている。又典型的な回想の体裁をとって、自然のもつ不動性、永遠性を歌った“Lines Composed a Few miles above Tintern Abbey”を知っている。しかるに、自然を通して大人が、世間に入る以前の幼年時代に得ていた幸福を想起し、これによって神との再結合を実感している作品、グレイのことばを用いるなら、「偉大なる総合」が実現されている作品、これの典型的な例をわれわれは「不滅のオード」以外には見い出せないのである。ワーズワスの「不滅のオード」の中断は、「偉大なる総合」への模索であったのではなかろうか。パウラはImaginationの中に靈魂不滅（想起説）の考えを最初から含めてし

まって彼の論を展開しているので、コールリッジとの関連において目から鱗がとれる程の鮮かな論述にもかかわらず、この作品に関する位置づけが一面的になっている嫌いがあるようにわれわれには思えてならない。

結びにかえて

さて、超感覚的世界と感覚世界、永遠不変の世界と生成消滅の世界という二元的世界観でよく知られているプラトン哲学の中心概念がイデアである。この語は時空を超越した、非物質的な永遠の真実在を意味している。ところでわれわれの生きている世界は生成消滅の世界である。従ってこの世界の個々の事物は実在ではなくイデアの影もしくはイデアの模像でしかないという。とはいえ真の知を獲得する方法がない訳ではない。その過程をプラトンは「想起」(anamnēsis)という言葉を用いて説明しているのである。それによれば、人間の魂は不死で、幾度となく生まれ代わるうちに天上界のことも地上界のこともすっかり知り尽くしてしまった。とはいえ、魂が新たな肉体に宿って地上に生まれ来る前に過去の経験や知は全て忘却の中に流されてしまうが、魂は肉体に宿る以前に天上界で見たイデアに与るものを地上界で経験すると、それを機に忘れかけていたイデアについての知を思い出そうとするのだという。⁽¹⁷⁾又、「人間の魂は、どの魂でも、生まれながらにして、真実在を観てきている。もし観たことがなければ、この人間という生物の中には、やって来なかった」⁽¹⁸⁾のだという。この限りでイデアの知は人間が人間であること⁽¹⁹⁾の条件なのである。

先述したように、ワーズワスはプラトンの以上のような考え方をプラトンや新プラトン主義、あるいはヘブライ主義に造詣の深かったコールリッジから知り得た訳だが、彼は、以上のようなプラトンの考え方を彼独自の形に変容させている。大きな両者の差違を挙げれば、幼年時代には天国が子供の周囲に存在していたという考え方はプラトンにはないものであり、従って、幼年期に自然の事物に寄せた愛情やその時代の回想が、神に見守られていた時代での経験で

あるが故に真理であったという考え方もワーズワス独自の解釈なのである。

さて、すでにみてきたように、ワーズワスには人間は自然にも劣る汚れた存在であるという考えがある。人間と同じ被造物でありながら自然の事物に神的なものを認め、神は人間には内在していないのではないかという彼の疑念をわれわれは“Lines Written in Early Spring”の中に見いだすことが出来る。これに対して一方、汚れているはずの人間の中でも子供は例外で、子供は清浄無垢で神性を無自覚的に備えているのだという。つまり神は人間に内在しているという信念も同時に彼の心に占めてもいる。この典型的な例をわれわれは“*It is a Beauteous Evenig, Calm and Free*”で認めることが出来る。ワーズワスの中には、以上のような矛盾が存在している。そしてこの二つの相対立する観念を調停し、人間特に大人を、引き上げ神との一体化を企るのにワーズワスが援用しているのがプラトンである。すなわち、プラトンのように考えると、人間である限りは、魂はかつて実在を目にしてきているはずであり、その事実を忘却しているとはいえ、これが人間の条件であった。これをワーズワス流に言い直せば、大人である限りは、かつて子供時代という神の御座所にて過ごした時期があったはずだ。だがその事実を忘却しているのではあるが、自然を観ていると自然の中には確かに神的なものがその背後に存在していることが、大人の今になって感得出来ることがある。するとかつての忘れかけていた幼年時代を想起し、幼年時代が神に愛されていた時代であること、すなわち大人の導き手が子供である (cf. *The Child is father of the Man.*) ことを自覚し、子供と大人とは想起によって一つに結びつけられ、大人は神とのより深い一体感を自覚し、知的にも、感性的にも倫理的にも一段と高次の人間性を獲得出来るのである。

日常生活の中で忘却により神から遠ざかった人間、人間同志の血で血を洗う闘争の最中に自分の愛する妻や子供を残してきて自責の念に嘔まされて人間不信に陥った人間、まさに神なき悲惨な状態の人間が、自然の事物から受ける愛と畏敬の念により、この世に存在するものの真実在は他ならぬわれわれの魂の

中に常にあることを自覚させる橋渡しをしているのがワーズワス流に変容されたプラトンの想起説であり、回想文学という彼の作品の特性が必然的に到達すべき帰結なのである。そしてワーズワスの思想の頂点を飾る想起の観念をみごとに作品の中に結晶化しているのが他ならぬこの「不滅のオード」である訳だが、なかんずく、第162行からのあの七行の詩行こそは、彼の「偉大なる総合の観念」の形象化に他ならないのである。

注

- (1) 以上は、ヘーシオドス『仕事と日々』 pp. 24-35, (岩波文庫, 1986年)を参照した。
- (2) Émile Legouis: *William Wordsworth and Annette Vallon*, p.2 (London,1922)
- (3) Ibid. ,p. 2
- (4) Ibid. ,p. 21
- (5) Ibid. ,pp. 21-22
- (6) Ibid. ,p. 1
- (7) これがやむをえざる後退であったことは確かであろう。精神が病んでいなければ彼は田園へ引き籠ったりはしなかったであろう。なぜならルグイは大学を卒業した頃のワーズワスについて以下のように語っているからである。
His mood was not yet attuned to the seclusion of a country hermitage. Hardly out of college, he had settled in London where he had just spent several months, idling about, drawn thither by the varied pleasures of the crowded metropolis,…… (Ibid. ,p. 2)
- (8) cf. “Lines Composed a Few Miles above Tintern Abbey” ll.122-123, Nature never did betray/The heart that loved her;
- (9) Émil Legouis:*The Early Life of William Wordsworth (1770-1798) A Study of “The Prelude,”* pp. 331-332 (London,1897)

- (10) *Journals of Dorothy Wordsworth*, p. 106 (Ed. by May Moorman, Oxford, 1983)
- (11) Ibid. , p. 137
- (12) Ibid. , p. 105, p. 106
- (13) Ibid. , p. 106
- (14) バウラ 『ロマン主義と想像力』
pp. 115–157 (みすず書房, 1989年) を参照されたし。
- (15) Coleridge: “Christabel” ll. 660–661
- (16) 以上は, バウラ 前掲書 pp. 145–146を参照した。
- (17) 以上は, 斎藤忍随 『プラトン』 pp. 160–161 (岩波新書, 1972年) を参照した。
- (18) プラトン 『パイドロス』 p. 67 (岩波文庫, 1989年)
- (19) 岡本昌夫 『想像力説の研究』 第二章「コールリッジの想像力説」(南雲堂, 1979年) を参照されたし。